人文会ニュース

2004. 3

学校を拠点に，自助・共助・
　最後に公助のまちづくり……岸　裕司　1

はじめまして……大垣守弘　3

ニホン人の壁……養老孟司　5

◉わが社の一冊……29

研修旅行報告……32

人文会活動報告……36

92

アーカイブス

野口体操

野口三千三＋養老孟司　DVDブック　2900円

●野口／養老／羽鳥　意識優位の脳化社会に今なぜ身体なのか。実技を交え、身体復活の可能性を探る。

ツバル　地球温暖化に沈む国

●神保哲生　水没の危機に瀕した、南太平洋の島国の苦闘。現実化する環境問題の衝撃！　2000円

春秋社　東京都千代田区外神田2-18-6　☎03-3255-9611（価格は税別）
http://www.shunjusha.co.jp/

◉現代は危機の真っ只中にある

惨事ストレスケア

緊急事態ストレス管理の技法

G・S・エヴァリー他著／飛鳥井　望監訳・藤井厚子訳

戦争やテロなど危機の現場で働く人たちの心のケアを行ないPTSDを予防するために考えられた書。　2730円

暴力男性の教育プログラム

E・ペンス他編著／波田あい子監訳

「ドゥルース・モデルから」妻に暴力を振う男性の更生を目指す。予価3990円

誠信書房　東京都文京区大塚3－20－6　TEL. 03(3946)5666　税込価格

「知の再発見」双書

■絵で読む世界文化史■

海賊の歴史

P・ジャカン著　増田義郎監修

古代の地中海をめぐる戦争と貿易の時代から、国家と海賊が入り乱れた名高いカリブ海の死闘まで、歴史の中の海賊たちを活写する。定価1470円（税込）

チベット

F・ポマレ著　今枝由郎監修

高い海抜地域にあるチベットの歴史、宗教、文学など、想像力を刺激する多様な文化。写真を見るだけでも価値のある美しい入門書。定価1470円（税込）

創元社　大阪市中央区淡路町4-3-6　東京都新宿区神楽坂4-3

自分の仕事をつくる

西村佳哲　人を満足させるいい仕事が生まれる、魅力的な現場を訪ね歩く。新しいライフスタイルとワークスタイルの提案。　1995円

椅子と日本人のからだ

矢田部英正　床坐民族にとってよい椅子とは？　身体的特徴、生活習慣にあった「坐る技術」を説く、椅子と姿勢の技術論。　1890円

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話03（3255）4501　価格は税込
http://www.shobunsha.co.jp

巻頭エッセイ

学校を拠点に、自助・共助・最後に公助のまちづくり

岸　裕司

「……次にはライオンさんが登場しました。そして……」と、ここまで読み聞かせが進むと、子どもたちは「うひゃ～っ！　ライオンまで乗ると、いちばん下のねずみさんやカメさんがつぶれちゃうよ～っ！」と叫びました。もうすっかり絵本の世界に入りこんでいます。秋津の地域文庫「竹の子おはなし会」のお母さんが、絵本『お月さまってどんなあじ?』の読み聞かせをしている最中のことです。

私が住む、千葉県習志野市立秋津小学校二年生のある日の国語の授業です。

お母さんやおばさんたち五人は、次々に子どもたちを夢の世界に誘い込みます。昔話「三枚のお礼」を素話しで聞かせ、時期にちなんだ絵本をブックトークで紹介します。

こんな学校おはなし会は、秋津の伝統的な学校と地域の方々との協働による授業です。

秋津小学校は、一九八〇年の開校当初から読書教育が盛んです。この「学校おはなし会」や「朝の読書」、お父さんたちによる余裕教室一室を丸ごと改造した「ごろごろとしょしつ」づくりや図書のパソコン検索ソフトの開発ほか、山ほどの地域との協働による読書教育の充実事例があります。

特に学校おはなし会は、全クラス毎学期一回×年間三回行うので、六年間に十八回、子どもたちは体験することになります。

ある方は、学校おはなし会で子どもたちに接することの価値を、こう話しています。

「学校だと、どうしても、本が好きじゃない子や、好きになるキッカケがなかった子もいるじゃない。でも、読み聞かせが終わってその本の集団貸し出しをすると、そんな子も奪うように取りにくる。うれしいですね！」

「返却時に『おばちゃん、この本、おもしろかったよ。また紹介してね！』といわれると、もっともっと上手になって本好きの秋津っ子をたくさん育てたい！　と思って、普段の練習にも意欲がでるのよね」

義務教育の学校で読み聞かせを行うことの意義は、公共図書館や公民館での読み聞かせとは少し違います。本好きな子どもや、わが子を本好きにさせたいと願う親の子だけがやってくるわけではないからです。

学校おはなし会の方たちは、いわば社会教育の実践者です。学校での授業は、学んだ成果の発表舞台でもあるからです。同時に学校にとっては、正規の国語の授業です。「教師一人では大変だけど、文庫の方々が本選びから読み聞かせまでを行ってくれるので助かるわ！」と先生からも好評です。

こういった、学校教育であり同時に参画する大人の社会教育も同時に果たす教育方法を、最近は「学社融合」と呼んでいます。学校だけが徳をするのではありません。大人も学びの主体者の位置づけです。

そんなことから、秋津小学校と地域では、さまざまな学社融合のプログラムを、意図的に開発してきました。クラブ活動への大人の参画、学校と地域の合同運動会、校内音楽会での合同合唱や演奏、校庭を改造しての小川の流れと池や田んぼもあるビオトープづくり……。田んぼの指導は、地域のおじさんたちが田植えから夏の水管理、秋の収穫までを担います。収穫した餅米は、みんなでお餅つきをしていただきます。

三年前には、上総掘りという千葉県伝統の手堀工法で校庭に井戸まで掘りました。「一人二㎝、二千人、みんなで掘れば四十m」が、地域に呼びかけた際のキャッチフレーズです。「二㎝なら掘れそうだから参加してみようかな？」と、思いませんか。結局延べ千人が参加して、四十八mも掘りました。井戸水は、「いざ！」の際の防災用です。学校は災害時の避難所であることから、避難した際の雑水用に地域のみんなで掘りました。夏休みには、ドラム缶に井戸水をためて、子どもたちと露天風呂も楽しんでいます。

また、学社融合で築き上げた学校と地域の信頼関係から、八年前には余裕教室四室を開放してもらい秋津小学校コミュニティルームの名称で、夜間や休校日を含めて四十にも増えたさまざまなサークルが、自らの生涯学習のために活用しています。

こんなふうに秋津では、学校を誰でもが集い学べる地域の生涯学習とまちづくりの拠点に変えてきました。その継続から、次代の人育ても果たしています。

学校だからといって教師や行政任せにするのではなく、地域のみんなで盛りたててきました。その理念は、「自助・共助、最後に公助のまちづくり」です。そんな実践を、私は新刊『「地域暮らし」宣言――学校はコミュニティ・アート！』（太郎次郎社）に書きました。

（秋津コミュニティ顧問）

書店からひとこと

はじめまして

大垣　守弘

初めまして、京都の大垣書店大垣守弘です。

私のような書店人がこのような場所に寄稿させていただくのは少し場違いかと思いますが何卒お許しください。

最初に私どもの会社について説明させていただきます。㈱大垣書店は昭和一七年に京都市北区の北大路烏丸にて創業しました。昭和二五年には株式会社に改組し創業以来六〇年余り書店業を専業として今日に至っております。私が大垣書店を手伝い始めた頃のお店はわずが二〇坪ほどの小さな店舗でした。しかし京都は学生の町、特に本店のある北区周辺には大学が集中し意外と学生向きの人文書が売れたものでした。支店が数件しかない時に、京都市の地下鉄が開通し、本店のある場所が地下鉄の終着駅となりました。それまでは外商を中心に商いをさせていただき本店の店売は社員一人で細々と営業させていただいておりました。しかし、この地下鉄開通を機に社員を採用し、少しずつ店売の方にも力を入れるようになりました。ただ、その頃は店売の売上を上げるために何をどうしたらよいのか全くわからず、私自身が書店大学などのセミナーや研修会に参加し勉強させていただきました。店頭の演出・品揃えなどについては他の書店を見学し「これは良い」と思ったことはすぐに真似をさせていただいておりました。また、当時は講談社さん、小学館さん、などのベストセラー商品の入荷が少なく大手書店の店頭を見ては悔しい思いをし、どうしたら仕入れることができるのか東京の出版社さんに訪問し出品のお願いをしておりました。

そうこうしている内一九九九年一〇月に私が代表取締役として就任し、今年で早くも丸三年が経過いたしました。就任するに当たって何をすべきかと考えましたが、無理をせずできることからやっていこう、なんでも前向きに考えよう、頼まれたことは断らないようにしようと考えておりました。また、めまぐるしく変化する時代の中で私どもの会社が読者の皆さんや出版社様に必要とされる書店であり続けるために何をなすべきかを常に考え

て行動しなければならないとも考えました。

昨年秋にお世話になった「書店新風会京都総会」におきましてご参加いただいた皆様、本当にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。私どもが新風会入会以来、「京都で総会を」というお言葉を頂きいつかは京都で開催しなければならないとは思っておりましたが、こんなに早く当番が回ってくるとは内心思ってもおりませんでした。しかし、お受けした以上は新風会の名に恥じないよう精一杯企画させていただいたつもりです。当然私一人では何もできませんので会員の書店さんにお尋ねしたり、社内でプロジェクトチームを作り準備を致しました。企画の内容はすべて当社に一任されておりましたので数ある企画案の中で絞り込むのに苦労し何度も会議を重ねました。特に知恵を絞ったのは「普段味わえない京都」の演出です。出版界の重鎮の皆さんはお仕事に、そしてプライベートにと何度も京都に足を運んでおられるでしょうし、旅行会社が企画した様なありきたりの旅行では満足していただけないと思っておりました。中でも、全店長によるコーラスは後に皆様から温かいお言葉を頂戴したのが大変有難く、社員にとっても大きな財産となり自信につながったものと確信しております。

ご承知のように書店新風会は全国各地の老舗書店五十数社の集まりであります。しかし昨今の時代の変化とともに書店地図も大きく変化しております。ナショナルチェーンの出店等により地方の書店は苦しんでいます。逆を言えば今まで甘やかされていたのかもしれません。独占の状態が続きお客様が満足されていなかったのでしょうか？　大いに反省させられます。

二〇〇四年もスタートしたばかりです。今年は好天に恵まれどちらも昨年に比べ大変良いスタートとなっているようですが、これで景気が良くなったと楽観している場合ではありません。マーケットは確実に減少しています。今一度気を引き締めて商売に取り掛かろうと思っています。

振り返ってみると私どもが今日あるのは皆様のご支援とご鞭撻ご協力のお陰だなぁと改めて感じております。一人では何もできなかったと思っています。出版界の皆様に今日まで育てていただいた事、誠に感謝いたしております。これからも私どもの会社が成長していくために努力を惜しまないつもりであります。生意気なところも多々あろうかと思いますが今後とも何卒よろしくお願いいたします。

（株式会社大垣書店代表取締役社長）

ニホン人の壁

養老孟司

変わる／変わらない

皆さんこんにちわ。養老でございます。最近思うことを申し上げてみようかなと思います。なんだか知らないけど『バカの壁』が売れちゃったのでいまちょっと忙しくなっております。六十四歳で死んでいれば売れてねぇのにな、とか思っております。世の中って、そういうふうに変わる。「変わる・変わらない」という話を申し上げようかなと思って参りました。

私は小さいときから、何かこだわるたちだったようでありまして、この歳になってやっとわかってくるんですけれども、ともかくありとあらゆることにこだわってきたみたいな気がするんですね。それとこれは関係があるんです。つまり、何でいまごろモノ考えたり何かするんだというと、昔からわからないことがあって、それが気になっている。つまり、こだわっているからであります。歳をとりますとそれがだんだん自分なりに解けてくるというか、見えてくる。そのなかで最初に「変わらない」という話をしますと、変わらないことを私はずっと追いかけてきたんだということがやっとわかったような気がする。

終戦のとき、私は小学校二年生だったんです。当時の世の中は、若い方はおわかりにならないと思いますけど、本当にバケツリレーをやって、竹槍を準備して、うちの母まで含めて、近所でバケツを運んだりしてました。「一億玉砕」とか「本土上陸」とか言ってましたから、子どもの私のほうはまるっきりそうだと思い込んでいるわけです。終戦のときは母方の祖父母のところに疎開しておりましたけど、八月十五日になっておばから「日本は戦争に負けたらしい」と一言聞いて、聞いた瞬間にだまされたと思った。

ことし、『民主と愛国』という小熊英二さんの非常に厚い本が出たわけですね。確か、毎日出版文化賞をもらったと思うんですが、この本は丸山真男とか吉本隆明とか竹内好という人たちが戦後に「民主と愛国」ということばに対して、どういうふうなことばを吐いてきたかということをずっと調べたものです。本の帯を見ますと「私たちは戦後

を知らない」と書いてあるんですね。その厚い本を読んでしみじみ思ったのは、おれこういうこと何にも知らないということなんです。本当に知らないんですよ。丸山真男さんが戦争中何を考えていて、戦後何を言ったかというようなことはいっさい知らない。吉本隆明さんが戦争中何をして、戦後それについて何を言ってたかということもいっさい知らないんですよ。

それはなぜかということは自分のことを考えてみると、答えははっきりしているんです。吉本隆明の本だって、丸山真男の本だって、私はずいぶん読んだんですよ。だけど、彼らが戦争中何を考え、そのあと戦後それについて何を言ったかということは私はいっさい覚えていない。聞く気がないんですね。覚える気もない。なぜかといったら、それはあたりまえで、僕らが育つころは子ども同士がけんかして、けんかして負けて泣いて帰ろうものなら、「男の子だろう、負けて帰ってくるんじゃない」と怒られるんです。負けて帰ってくるんじゃないなんてむちゃくちゃな話ですけど、何で負けたんだという話をぐちゃぐちゃすると、それは言い訳になっちゃってまた怒られる。それは昔ふうのことばでいえば、「敗軍の将、兵を語らず」でありまして、負けた戦についてぶつぶつ言うんじゃないというのは、ある意味でわれわれが徹底的にたたき込まれたことなんですよ。だから、負けて帰ってきたんなら次はどうする、というふうに考える。

その戦争も負けたわけです。したがって、負けたことについてぐずぐず言うのは、少なくとも私の価値観にはなかったんですよ。それではだまされたと思ってどうなったかというと、私はさっきこだわると言いましたけれども、やっぱりずっとこだわっているんですね。何にこだわったかというと、どうして負けたんだということです。戦後の典型的な常識として「物量に負けた」というわけです。「車はガソリンがなければ走らないんです」というコマーシャルがありましたけれども、まったくガソリンがなければ走らないんです。飛行機も飛ばない。しかし、飛んだからといって、相手の飛行機のほうが性能がよければ必ず負けるんです。それを無視してあれだけの特攻隊を繰り出して徹底的にやって、ついにバンザイしたんです。そこまでやってだめだったのはどうしてかというと、いわばあたりまえのことを無視したからです。そんなことは当時のわれわれにとってはあたりまえの常識だったわけです。「プロジェクトX」というのをNHKでやってますけど、なんであんなに一生懸命命がけで計算機をつくったのか。戦後の日本はモノ作りだというんですけれども、日本人はモノ作りが得意だからモノ作りした、というふうに普通とらえられていると思うんです。けれども、私はそうではないような気がするんです。あれはある意味で戦争の引っくり返し、ないしは戦争の継続なんですよ。物量に負けた。よくよく考えてみるとこれを無視したからです。それじゃというん

で科学技術というものを考えてみますと、いまでも「科学技術立国」とかいってますけど、どうしてそうなったかと考えてみると、科学技術は変わらないんですね。いかに社長が正義の味方で、社員全員が勤勉で、まじめでりっぱな人たちであっても、作った飛行機が飛ばなきゃ話にならないんですよ。それを別なことばで「科学技術立国」と言いかえてきただけのことで、いまだに言ってますよね。だけども、いま言っているモノ作りとか科学技術立国というのはたぶんだめだろうと思う。

それで、「普遍」というのを追いかける。なんのことはない。昔の人はこれを「真理」といったんですね。時間とともに変わらない。どこに持っていっても成り立つ。それでは僕らは真理を追いかけていると思っていたかというと、そんなもの全然思っていません。「真理」なんて、いまは死語でしょう。「先生、真理を追いかけていると思いますか」と大学の先生に順繰りに聞いていったら、たぶん一人も言わないんじゃないかと思うんですね。だけども、考えてみると、それをなんとなくやらされちゃったというわれわれは、はなはだ幸せな世代だったのかなといま思うんですよ。知らないうちに「変わらないもの」を追いかけてきた。

解剖の確実さ

私はよく、「医学部を出てどうして解剖をやったんですか」と質問されます。いろんな答えをしていたんですけど、この歳になってもう一度考え直してみると、それには大きな背景がある。患者さんってせきをしたり、熱を出したりして医者のところに来るわけです。医者はいろんなことをやって、次の日来ると患者さんは変わっているわけですよ。せきが止まった、熱が下がった、さもなきゃどんどんひどくなってそのうち死んじゃった、ということになります。要するに、どんどん変わっていくわけですね。そうすると、私の暗黙の気持ちのなかに、そういうものはあてにならんということがあるわけです。変わっていくものはあてにならないんですよ。じゃ変わらないものは何だというと、これは死んだ人なんです。死んだ人はこれ以上変わりようがないんです。そうすると、それは確実だという感じがしてくるんですね。

私は解剖をやろうと思って昭和三十八年に解剖の教室に入りましたけれども、そのとき医学部に若い教授が二人おられたんです。それは昭和二十年卒業、つまり、終戦の年に卒業された教授です。当時、三〇代の終わりか、四〇代のはじめ、そういう若い教授が二人おられた。その一人が細川宏先生であります。四四歳で胃がんで亡くなられました。その細川先生は富山の砺波の出身で、大変な秀才だったんですよ。どのくらい秀才だったかというと、戦争中に医学生でしたから、当時のシステムは私は何だかわかりませんでしたけど、陸軍軍医学校に行かされたというんです。

そこでは入学試験みたいなものを受けさせられた。ところが、その試験を受けたら、だめだ、もう一回試験を受けろといわれて、二回試験を受けたという人なんですよ。どうして二回試験を受けたかというと、最初の試験の成績がよすぎて、試験官が「こんなはずはない。もう一回試験をやらせろ」と言われた。それでもう一回試験をしたら成績が同じで、しようがないから入れたという人です。その細川さんが個人的にいわれたことを、私はよく覚えているんです。「ああいう時代に医学のなかで一番確実な学問は何だと考えたら、それは解剖だ。私はそう思ったから解剖に入ったんですよ」と言われたんですよ。それをいまだに私が覚えているということは、いま考えてみれば、私自身がそれに共鳴するところがあったんです。当然忘れちゃっていいことなんですけれども、いまだにしつこく覚えている。

それでは解剖のどこが確実なのかといったら、おなかを開けたときに胃袋が三つあったとしても、あったものはしようがないだろうといえる世界なんですよ。おなかの中からメスが出てきて、こんなものが出てきてはならないとか、あってはならないということがいえない世界なんです。あったものはしようがない。胃袋が三つ出てきたら、「三つあったんだ」と。これで終わりです。そういう世界って、ほとんどないでしょう。ある意味では、われわれはそのくらい確実なものをどこかで求めていたわけです。私なんかはその確実さというものに引きつけられたんですよ。たとえば東大に入った教養のクラスは十何人が大学に残りましたし、医学部は定員八十名で、一割増しで採っていましたから、八十九人でしたかな。そのうち十%、一割以上、つまり十人が基礎医学をやりました。それはみんなで約束をしてやったわけではなくて、たぶん雰囲気だったんだろうと思います。つまり、私どものクラスには臨床の医者にならなかった人がそれだけいたんですよ。それを追求してみればこれじゃないかと、いまになって思います。患者さんを診ているのは日々の裁量で、目先はどんどん変わりますけれども、確実性が足りない。基礎医学というのはそこで出来上がった事実は変わらないだろうと思った途端に、それより百年前の話がすーっと通るじゃないですか。

何をいっているのかというと、明治維新ですよ。私はその後北里大学に行きましたけど、北里柴三郎という人を考えてみてもおわかりいただけると思うんですね。あの人は熊本の出身で、たぶん幕末の熊本で育った人だと思いますけど、それがベルリンに行ってコッホのお弟子さんになって、ベーリングと一緒に多くの業績をあげて、いまでいえばノーベル賞をもらって当然の人であります。熊本のいなかから出てきた人が何だってあんなことになるんですか。当時の偉い学者をあげたらきりないでしょう。志賀潔とか、鈴木梅太郎とか。じゃ、あんな江戸という時代を過ごした人が何で自然科学なんかをあれだけやって、しかも世界的な業績をあげたんですか。

考えてみると、私と同じだったんだろうなと思います「仁義礼知信忠孝貞」というもので三百年やってきて、それががらっとひっくり返って鹿鳴館ですから。そんな時代を私くらい小さいときに通ってくると、こんなものは変わるなと思っていると思うんです。じゃ変わらないものは何だと暗黙のうちに考えると、別に熊本のバイ菌もロンドンのバイ菌も変わりません。バイ菌はバイ菌ですから。何で私がこういう人生を送ってきたかと考えてみると、何のことはない、戦争だよなと、歳とるとこういうところに戻ってしまうんです。

「うそから出たまこと」

それでは「変わるもの」って何だと、次にそういう話になります。変わるものというのは、たとえば本が売れたという話です。これは何で売れたかとずっと私も考えているんですが、こういうものは全部あと知恵です。最初は売れるなんて思ってないわけで、あと知恵で考えるとだんだん思い当たることがあるわけです。いま一番極端に売れているものは何かというと、本でいえば世界的には『ハリー・ポッター』じゃないかと思うんですよ。この間新聞の広告を見たら、四億冊以上売れたとか書いてました。いま世界の人口は六〇億ですから、これはものすごい数です。似たものでほかに売れるものがあるかと考えると、最近少し落ちてきたけど、ずっと売れてるのは漫画ですよね。なかでもアニメが売れまして、『千と千尋の神隠し』が大変な観客を動員したりする。二千万とか三千万とか、そんなことといってます。そうすると漫画が売れて、しかも日本じゅうテレビゲームばやりです。私はゲーム大賞というのの審査委員長になっているのでたいていのゲームは知ってるんですけど、ゲームがはやってますね。漫画がはやって、アニメがはやって、『ハリー・ポッター』がはやっている。ファンタジーですな。なんとなく共通点が見えてきませんか？　『水戸黄門』はつぶれないし、時代劇は相変わらずやってます。こういうものに共通の特徴とは何でしょう？すぐおわかりいただけるでしょう。

要するに、時代劇であろうが、ファンタジーであろうが、漫画であろうが、アニメであろうが、それを現実だと思うバカは最初からいないんですよ。現代風にいうとああいうものはパッケージに『真っ赤なうそ』と書いてある。「これは真っ赤なうそだよ」と、最初からまず出してきます。真っ赤なうそですから、お化け屋敷みたいなものですよ。お化け屋敷というのは入りやすいし出てくるのもどうせうそに決まっているんです。だから安心して入るわけでしょ。お化け屋敷に本当の殺人鬼が隠れていたりすると、これはやっぱり相当不気味なホラーになるわけです。それと同じじゃないですか。いまの人は「真っ赤なうそ」というパッケージがないとたぶん買わないんです。どうしてかというと、その引っくり返しを考えてみればすぐわかるわけです。

じゃ、真っ赤なうそじゃないものは何か。

真っ赤なうそじゃないと自分から強く主張するものを考えてみると、ＮＨＫであり、朝日新聞であり、読売新聞であり、云々でしょ。つまり、典型的な大メディアですよね。僕はＮＨＫの関東の番組の審査委員長とかやらされましたけど、そのつど報道局長という人が出ておられて、報道が問題になるたびに、「ＮＨＫの報道の原則は公平・客観・中立です」と必ず言っておられました。僕は聞き飽きて、そのあとは悪口しか考えつかなくなっちゃうんです。じゃ、公平・客観・中立の報道とは何だと考えてみてください。たとえばダイアナさんが死んだ事件について、あれを殺人だと書いた新聞もテレビもない。だけど、相変わらずくすぶっています。私はあの事故をテレビとか新聞で報道されるのを見た瞬間に、もうこれは殺人だとはじめから思っていました。だけど、そういうふうには絶対に書かない。つまり、あれが推理小説であれば、「あれは殺人だ」と必ず書いてありますよ。だから、私は推理小説を読むんです。ダイアナ事件の報道なんか読まない。だって、読んだらどんどんわからなくなるんですから。そういうものをいくらでも報道している。つまり、イラクで話がどうなっているんだかわからないんです。いったいだれが爆弾をしかけているのか、だれが特攻隊やって死んでるのか、いっさい報道されないんですよ。ビン・ラディンがああ言ったとか、こう言ったとか、あいつが宣伝しようと思っていることが伝わってくるだけで、本人にインタビューした人なんか全然出てこないんです。そうしたら事実報道って何なんですかね。公正・客観・中立ということは、実は本当のことをいうと何も報道してないんじゃないか、という疑いを皆さんもっているんじゃないでしょうかね。そういう報道のなかに埋まっていると疲れるんですよ。だからたぶん若い人はＮＨＫを見ない、新聞を読まないということになってくる。だって、読んでもわからないんだから。私もわかりませんよ。イラクがどうなっているかなんて、そんなこと知りません。

そういうふうに現在われわれが現実と考えているものはきわめて疲れるものなんですよ。そうすると、そういうものはもうたくさん、という気持ちになる。それで皆さん方どうするかというと、入りやすいものに入っていく。それが漫画でしょ。アニメでしょ。『ハリー・ポッター』であり、『千と千尋』ですよ。もともと『ハリー・ポッター』なり『千と千尋』は何をうったえているかというと、昔からいっているように「うそから出たまこと」です。つまり、さっき僕はここに「真理」と書きましたけど、そういうものは実はうそから出るんじゃないかという気がするんですよ。小説とか芝居というのはもともとそういうものです。芝居を本当だと思う人ははじめからいないんです。だから楽しみとして見に行くわけでしょ。しかし、見ているうちにどんどんつり込まれて、途中で泣いたり笑ったりしてい

るわけですよ。じゃ、そのどこがうそなんですか。実生活のなかで皆さん本気で泣いたり笑ったりすることは、いまではほとんどないでしょう。しかし、芝居を見たり、テレビを見ているうちに泣いたり笑ったりしているわけですよ。つまり、それが本当じゃないですか。お化け屋敷のなかに入っていって、出てくる化け物はうそに決まってるわけです。だけど、そこで感じる恐怖は本物ですね。「うそから出たまこと」というのはそのことでしょ。ところが、そんなものは現実ではない、というのがいまの人なんですよ。

そんなものは現実じゃないというのはそのとおりなんですが、人間を徹底的に引きつけてきて動かしてきたものはいくつもあります。その一つはロマンであり、神話がそうですね。世界はどういうふうに創られたか。中でどういう人がどういうことをしたというのが神話であって、最近神話で非常に売れた本がありますでしょう。村上春樹さんの『海辺のカフカ』ですよ。これはギリシア神話を題材にしてますから、あれを読んでいて本当の話だと思うひとはだれもいない。なぜかというと、途中でジョニー・ウォーカーとか、わけのわからない人が出てきて、完全にホラーになったり、ファンタジーになったりしています。「これはうそだよ」ということをしばしば村上さんは読者に確認しているわけです。これはうそだよということをああいうかたちで確認すると、いまの人はたぶん安心して読むんですよ。そして読んでいるうちにお化け屋敷のお化けと同じで、そのなかにつり込まれて、はらはらしたり、喜んだり、悲しんだりしているんだと思います。それをはじめから本当かうそかわからないＮＨＫみたいなかたちで、いわゆるリアルに提示していくと、皆さん方重苦しくなって嫌になって逃げちゃうんですよ。だいたい、本気でリアルな体験をしたいんであれば、本なんか読む必要ないんですからね。現実の生活をしていればいいんですから、新宿を歩いているほうがまだましだと、こういう話になるわけです。そうしたら、ロマンとか芝居とかいうものはもともとそういう「真っ赤なうそ」という舞台を設定しておいて、そこで人に真実を感じさせるものなのではないか。考えてみればそれはあたりまえです。「真理」と同じで、はやりません。

個性ははじめからある

それでは私の本が何で売れたかということで中身を考えてみますと、何のことはない、皆さん方が考えている現実というのは頭で考えていることでしょ、といっただけです。頭で考えているということは、つまり『平家物語』の世界じゃないですか。『平家物語』で、「夢幻のごとくなり」といってます。信長は「人生五十年」といいました。それと同じでしょ。「春の夜の夢のごとし」といったのが、正確にいえば『平家物語』です。皆さん方が見ている現実は春の夜の夢ではないか。それは脳が現実だといっているもの

なんだから、脳みそを変えれば変わるでしょうがと。確かに、脳みそを変えれば変わるんですよね。ボケれば世界が違って見えますし、若いときと歳をとったときでは、私が見ている世界はすっかり違っています。ただ、若いときにどういうふうに世界を見ていたか、よく覚えていません。ですから、比べようがないんですけど、違っているに決まっています。それと同じことで、われわれが見ている世界というのはわれわれ次第でどうにでも変わっていくものです。それを『平家』は「春の夜の夢のごとし」といったんだと思います。信長はそれを「人生わずか五十年、下天の内を較ぶれば、夢幻の如くなり」という謡いで表現しています。信長にしてそうなんですよ。そうしたら普通の人生って、まさに夢幻じゃないですか。

要するに、最初から「真っ赤なうそだよ」といえば、ひょっとするとみんなが読むんですよ。どうして読むかというと安心だからです。しょせん、そんなものはうそだよ、何でもあてにならないよという話から始めれば、それじゃ次にでたらめのほうに行くかというと、そうはいかないんですよ。だから、最初に「変わらない」話をしたんです。じゃ、当てになるものは何だというと、人間というのはけっこうまともなほうに行くんですよ。ですから、現代社会の一番大きな問題点は、NHKなり読売新聞なりがど真ん中に座ったということになるわけです。それがど真ん中にあるように座ると、何らかの確実な事実が世の中の真ん中にあるような気がまずしてくるわけです。じゃ、それは何だということをまともに考え出すと頭が痛くなる世界になっちゃったんですよ。頭が痛くなった人たちは何をしたかというと、『ハリー・ポッター』を買って読んでいるわけです。そういうふうに私には見えるんですよ。皆さん方がどう考えるか。それは皆さん方の好き勝手であります。

こんな「変わる・変わらない」ということを六十六までずるずる考えているから、私みたいになっちゃったんだなと、最近やっと自分なりに少しわかってきたような気がするんです。ボケたからそうなったのかもしれないんです。じゃ変わらないものは何だというと、いまの人は必ず、「私は私」で、変わらないと思うわけです。そんなことをいうけど、去年のあなたとことしのあなた、あるいは去年の十一月十四日の私とただいま現在の私では物質的にどのくらい同じかと考えたら、九割違ってます。だって、私の体は七割水ですからね。この水は全部入れかわっています。いつもいうんですけど、去年の水の分子でことしも残っているやつは永年勤続で表彰ですよ。だって何十トン、何百トンの水を飲んでいるんですから。飲んでいるだけじゃなくて、食べ物が代謝されて尿素も出ますけど、ほとんどは炭酸ガスと水になりますからね。その水も全部体に入っているわけですから、入れかわっているに決まっているじゃないですか。皆さん方はおなかのなかに腸を持っていて、全体をはかると六メートル、七メートルありますけれども、

その表面を覆っている細胞だっていっそうありますよ。これは三日に一回全部入れかわっちゃうんです。小腸に絨毛というのが生えていて、絨毛のてっぺんからどんどん落ちていくんですよ。下からふえたやつが上がってきてどんどん入れかわります。三日に一回入れかわっている。そんなにどんどん入れかわったらもったいないじゃないかと思うかもしれませんけれども、幸い落ちるところは腸の中ですから、もう一回分解して吸収してしまえばいいんで、すぐもとに戻ってくれますから、それはむだではない。それで小腸はほとんどガンができません。たぶん、あれはガン細胞ができても次々新しいのが押してくるからすぐ落ちてしまうのだろうと思います。そうやって考えてみると、物理的にわれわれは同じ人間であるはずがないんですよ。

ところが、近代社会は「私は私」という前提を置いたわけです。これをいつ置いたのかということを調べてみると、たぶん十九世紀のヨーロッパという答えが出てくる。ですから、「私は私」というのをしようがないから西洋近代的自我と呼ぶことにするわけです。「私は私」というのは、これだけいうと「私」を追求することになる。だから西洋哲学は「私」を追求したのであって、「自我」ということばもできた。これを一番見事に一言でいった人がデカルトであり、デカルトのコギト、「我思う、故に我あり」というものになったわけです。デカルトはそれ以上何かいったかというと、何もいっていません。どうしてかというと、「私」というのはそれ以外にないからです。皆さんはそれ以外に「私」という内容があると思っているでしょうけれども、私はそんなことは信じていません。そこに内容があると信じたのが西洋近代的自我ですから、したがってそこに内容があるとすれば、それは「個性」と呼ぶべきだろうという話になるわけです。そういう個性が西洋ではかちっと存在しますから、当然一九〇〇年になるとノーベル賞ができるわけですよ。科学をやるのは個人のすぐれた個性が生み出すんだと、こういうふうに考えるわけです。

それではすぐれた個性が生み出したもの、たとえば皆さん方がモーツァルトの曲を聞くと、好きな人も嫌いな人もいるでしょうけれども、たいていはいい曲だなと思って聞いているわけです。ほとんど多くの人がいい曲だと思うものが何で個性的なんですかね。皆さん方はずっと「個性的な教育」とかいってやってきたんじゃないでしょうかね。お母さんが、「うちの子は個性的に育って本当によかったですよ。おかげで算数の答案はほかの子と答えがみんな違うんですよね。感情豊かで、一人で部屋にいるときにこの間は大声で泣いてたけど、いまは一人で大声で笑っているんですよね」と言う。普通、そういう子は医者につれていくんじゃないですか。つまり、皆さんの個性はどこにありますか？　こうやって顔を見てれば歴然としてるんで、まあいろいろな人がいますな。よくもこれだけ違う人を集めたものだと実は思ってるわけです。それが個性じゃないです

か。人は一人ひとり違う。そんなのはわかりきった話であって、個性というのははじめからあるんですよ。別に皆さんこういう顔になろうと思っていままできたわけではなくて、身長とかはひとりでにそうなったわけでしょ。まあ体重くらいは最近の人はコントロールできると思っていて、えらい苦労してますな。それが人生の目的みたいになっている人もずいぶんいますけど、僕は放ってます。放ってるとこのくらいと適当に体が決めてます。それが個性でしょ、個性は体に決まってるんですよ。

西洋近代的自我が成立すると何が起こったかというと、これは日本だけなのかもしれないし、ヨーロッパもそうなのかもしれないけど、頭に個性があるじゃないですか。頭に個性があると、さっき言いましたように理屈に個性があるという話になる。何のために私が一生懸命こうやってへ理屈言うのかといったら、皆さんにわかってもらおうと思って言っているわけです。わかってもらうためには理屈を通すのが一番いいんですよ。理屈が通っちゃうと文句いえないんです。それが一番ぎりぎりいっているところは数学でしょう。だから、私一人の理屈なんていくらいってみても始まらないんです。それは定義により、私一人しか納得しないんですから、そんなものは意味がない。感情はまったく同じで、感情なんて個性的だったら困ります。

私だけの思いとか、個性的な感情って何ですか。それは別にあったっていいんだけど、皆さん方が私だけの思いをもっているということは、定義により、それは私に何の関係もないということですから、したがってそんなものはあってもなくてもいいというわけです。つまり、そういうことは普通「どうでもいいこと」っていうんじゃないですか。そうすると心のどこに個性がありますか？　テレビを見ているとわかりますけど、喜劇みたいなものをやってお客の笑い声を入れてるじゃないですか。あらかじめ笑い声を入れてやってますよね。何で笑い声を入れるかというと、テレビから笑い声が聞こえてくると、視聴者はひとりでに笑うわけでしょう。感情は共感でしょう。友達が入試に落っこって泣いてるとこへ、隣で大笑いしてざまーみろといったら、絶対友だちではいられないですよ。やっぱり、かわいそうにと言って隣で泣いていればいい友だちですよね。そんなことはあたりまえじゃないですか。そうしたら感情は共感であり、理屈は共有ですよ。そこに個性なんかあったらえらいことになっちゃう。だけどそこに個性があると皆さん方信じているんじゃないですか。私はたいていの人は信じてきたと思いますよ。だからノーベル賞なんでしょ。だから知的所有権なんでしょ。だけど、メンデルの法則はメンデルが発見して、死んでから三十年後に三人の人が発見します。メンデルが偉いと思うのは勝手ですけど、いずれにせよ、時期が来ればそれはだれでも発見しちゃうわけです。話があるところまでいけば、発見せざるをえなくなっちゃうんだから。それを先に発見した人が偉い人だ

という価値観は、それはそれでいいんですよ。私が先に発見したものはたくさんありますよ。私は解剖をやってましたけど、解剖なんて時代遅れの学問だと、若いときからそういわれてたんですよ。私が解剖に入ったときに、「いまごろ解剖なんかやって何かわかることありますか」ってしろうとに聞かれましたもの。それやってたら、そのうち最先端とかいわれるようになってあーあと思いましたよ。どうしてかといったら、それはオリンピックのトラック競技と同じで、同じところをぐるぐる回ってるから、一番びり走っているとそのうち先頭に見えてくるときがあるんですよ。それで先頭になったり、びりになったりしていました。それだけのことです。

「私」は変わらない

私は自分の本によく書くんですけど、「ここに書いているのは私の意見か、人の意見を聞いて私がいつの間にか自分の意見だと思い込んで、それでここに書いているのか、全然区別がつかん」と。だいたい、そうに決まっているんで、私は日本語で本を書いているんですけど、その日本語をいつ、どこで、どうやって覚えたか記憶がないんです。皆さん方がお使いになるすべての日本語の単語は、自分がそれを覚えこんだ瞬間が必ずあるはずなんですよ。ありとあらゆる単語が教科書に書いてあったはずはないので、すべていつかどこかで覚えたんです。それがいつ、どこで、だれから教わって覚えたか思い出せますか？　そんなもの思い出せるわけないんです。人間の記憶ってそうなってまして、あとでそのことばを使っていろんなことをいうんですけど、それは全部人まねといっちゃ、人まねなんです。それはだれでもわかるものでなければ意味がないんですよ。人に一生懸命わからないことをいってみても始まらないじゃないですか。僕はそれやってたからよく知ってるんです。実際、人に一生懸命わからないことをしてるんですよ。病院に行けばいくらでもいますよ。そうしたら、乱暴なことをいうようですけど、頭について独創性とか知的所有権とか個性とか、こんなものはないというのが私の意見です。できるだけだれにでもわかるものを提示した人が偉い人なんですよ。おもしろいことに、人間ってできるだけ多くの人にわかるものを示すことはあたりまえのことだと思っているんですけど、実はそれがあたりまえじゃないということがよくわかるじゃないですか。どうやったらだれにでもわかることがいえるのか。

ところが、十九世紀以降、日本は「個性」といってきたんですよ。それを「私」だと、つまり「私」は同じだということになった。「私は私」という考えが成り立つためには、同じ「私」がなきゃいけませんからね。同じ「私」でなきゃ、皆さん朝目が覚めるたびに、はて私はだれでしょう、と考えなきゃならないでしょ。目が覚めた瞬間に、「あ、私」と思っているでしょ。つまり、それが意識が戻

るということで、意識というのは「私は私」だというものなんですよ。それが意識の働きなんです。意識が「私は私」だといわないときはどういうときかというと、夢のなかです。夢のなかで皆さん何にでもなるでしょう。男の人は女になり、年寄りは子どもになり、子どもはひょっとすると大人になり、極端な場合はゴキブリになったり鳥になったりしている人もいるかもしれない。夢のなかではどうなったっていいんですから。むずかしいうと、夢のなかでは自己同一性は成り立たないんです。そうすると皆さんは夢は夢でしょうが、という。そうではなくて、夢だって意識の一種ですよ。だから、それから覚めると「私は私」というのに戻るでしょう。要するに、覚めた意識というのはどういう意識かというと、「私は私」だという意識ですよ。それをデカルトがコギト、「我思う、故に我あり」といったんですよ。それでは「我思う」の我とは何ですかと質問すると、答えはないんです。「この私」というしかない。しかし、「この私」は何だというと、去年とことしで違うんです。物質的に九割違っちゃうんだから。

現代は客観的な事実を中心とする、それこそNHK放送局の世界ですから、NHKふうにいえば、「ことしの皆さんは去年の皆さんではない」といわなきゃいけない。客観的にはそうなんですから。でも、この社会は「ことしの皆さんは去年の皆さんと同じだ」ということになっている。そんなことをいうから、普通に生きていると頭が痛くなるわけですよ。こういうものがあるとしても、けっこう世の中動いてきたということも私はよく知ってるわけです。こんなものを世の中に持ち込んだら面倒なことになるよ、ということを偉い人はわかっていたと思うんですね。

それがわかっていた典型的な人が、私は漱石だと思うんですね。ですから、漱石はロンドンに行っていろいろ本を読んで、一生懸命「私」ということを考えて、どう考えても西洋人が考えている、漱石の時代からどんどん発展してくる「この私」というのはおかしいなと思ったんだと思う。だけど、世の中はその方向にどんどん動いていく。あれだけまじめに考える人ですから、胃潰瘍になったんですよ。それで血を吐いて五十にならないうちに死んでしまった。そんな若いときに死んで、死ぬ前に何といったかというと、「則天去私」といったんですね。私は高校生のときにこれを見て、ことばは即座に覚えたけど、意味は全然わかりませんから、まあ明治の人というのは若いくせに年よりじみたことをいうもんだなと思っただけです。何で天にのっとって私を去るのかよくわからない。でも、この「私」というのは、いま私が言ってきた「私」でしょ。「私は私」の「私」です。漱石も本当はそんなものはないと言いたかったんだろうと思うんです。あの時代にそんなこといえません。

これをうんとさかのぼってみると、そんなにさかのぼらなくても江戸時代だっていいんですけど、秀吉の時代にも

うはっきりしてるじゃないですか。『太閤記』では小さいときは日吉丸ということになっていますけれども、尾張の水飲み百姓の息子が日吉丸なんていわれているはずがないんで、どうせ猿とか小猿とかいわれていたに違いないと思います。それが侍になると木下藤吉郎になって、大名になると先輩の柴田勝家と丹羽長秀の苗字を一字ずつもらって羽柴秀吉になって、もう少しすると自分で一家を立てて豊臣秀吉となって、死ぬころになったらてめぇの手紙になんと「天下」と署名している。天下が名前になっちまってる。人はずっと変わっていくじゃないですか。秀吉なんかは典型的にそう思ったに違いない。当時だったら、尾張の水飲み百姓の息子と天下とは、天と地の違いです。それが同じ人というわけではないだろうがと、本人だって思っていたと思います。それは近代的自我でいうなら、同じ「人」です。この近代的自我というのはどう考えてもどこかおかしいという気がだんだんしてきた。それを変わらないと皆さんお考えになって、変わらないのが「私だ」と定義するようになってしまった。

　変わらない部分が「私」だと定義すると、この論理は壊れません。壊れようがないんです。なぜかというと、人生有限で必ずどこかで死にますから、死ぬまで変わらない部分が本当の「私」だといい続ければいいんですからね。皆さん三つのときからいままでどこが変わらない部分だかおわかりになります？　そんなのわかりませんよ。だから、だれかを好きになって二、三年たって両方ともすっかりあきてしまって大げんかして別れる。本当に好きな人じゃなかったんだとかいってますけど、そうじゃなくて、そのときは本当に好きだったんだけど、自分が変わっちゃうと本当に好きな人じゃなかったとかいう話になるだけです。それだけのことだと私は思う。だけども、いまそんなことをいったらたいていの人が嫌がります。そんなことを認めたら社会が壊れちゃう、とすぐ思うんですよ。人が変わるなんてことを認めたら、まず第一に、きのう金を借りたのはおれじゃないというやつが出てくるに決まっている、と思ってるわけですよ。

　それではかつて、秀吉の社会はどうして成り立ったんですか。人が変わるのが前提だったんです。当時は名前だって変えたんです。だから、信とか義とかいって約束を守ったんですよ。人間は変わるものですから、約束を守った。さっきからいってるように、変わらないものは何かというと、ことばです。現代社会でことばが変わらないと直感的に思っている人は、僕はほとんどいないんじゃないかと思う。書いたものは変わらない、というくらいは思っているんじゃないかと思います。それは借用書を書いてみればよくわかる。ここのところ十年デフレですけど、十年前に書いた借用書はデフレだから相当目減りしていていいと思うんだけど、借用書は全然目減りしませんもんね。いつも同じ金額を書いてあります。書いたものは変わらないんです

よ。だけど、おしゃべりはそうじゃないでしょう。こんなにふらふらしているものはしょっちゅう変わる。だから若い人はいいますよ。ことばでは何でもいえるとか、ことばはあてにならないと。それはまったくのうそでしょ。ことばくらいあてになるものはないんですよ。だって、いったんしゃべったら止まっちゃうんですもん。それはテープレコーダーができてはじめてわかったことですよね。テープレコーダーに入れておくとしゃべったことが止まってるんですよ。テレビでしゃべってることをビデオに入れたら全部止まってます。手まね身振りまで止まっています。それを情報というんだろうと僕はいったわけです。だから、情報というのは止まってる。皆さんは井戸端会議しているときに、自分のしゃべってることが止まっていると思っていないでしょ。だから、「これはここだけの話だけど」とかいってやってるわけでしょ。ここだけの話だといって安心していられるのは、相手の記憶が自分程度に悪いという固い信念をもっているからであって、相手がテープレコーダーを持っていると思ったら途端に黙ってしまいますよ。だからことばはやっぱり止まってるんですよ。昔の人にとってはそれはあたりまえで、だから約束を守れといったんですよ。約束というのはことばでするものですから。そうしたら相手がいくら変わろうが、約束は変わらないんですよ。

いまの人がいかに約束を守らないかというのは不良債権ですぐわかるじゃないですか。借金というのは返すという約束がついているんですよ。それがいつの間にか返さなくてよくなったんですよ。だって、新聞にあれだけ大きく「不良債権」って書いてあって、それを一生懸命政府が税金で片づけてるんだもん。何だか知らないけど、私たちが借金返してるんですよ。借りたやつが返していれば問題ないはずなんです。何でそんなことになったかというと、借りても返さないということが起こったからであって、借りても返さないというのは約束を守らないということですよ。

それではその根拠は何かというと、ことばは変わるけど、「私」は変わらないということでしょ。「私は変わらない」という前提を置いた瞬間に、私がした約束は壊れるはずがないということなんですよ。だって、本当の「私」がいったことなんだから。これは逆です。そう思ったから世の中めちゃくちゃになったんですよ。変わるものが変わらないといって、変わるものを変わるといったんだからね。つまり、ことばという変わらないものは軽いもので変わるものだと思い込んで、人間というどんどん変わっていくものを変わらないものだ、私は私、同じ私と思い込んだから、いまの世の中になったわけでしょ。それで年輩の人は世の中変だとかいってますけど、大前提がひっくり返ってるんですから変になるに決まっています。

単純な凶器がシステムを破壊する

私は「変わる・変わらない」という話をずっとしてきました。変わらないものは何で、変わるものは何だと考えると、ある部分では変わるものと変わらないものはひっくり返っているのではないか。それでも変わらないものはある。科学技術は変わらないだろう、という話をしたわけです。今度、科学技術はどうなったかというとここら辺がややこしいんです。僕は月ロケットが飛んだときに書いたことがあるんですよ。「アメリカが月にロケットを飛ばした。あんなでっかいブリキの筒があんな大きな音で飛んだらだれだってびっくりする。だけども、飛ぶだけならハエでもカでも飛ぶ。悔しかったらハエかカをつくってみろ」と書いたんですよ。ハエたたき一本あればハエなんか簡単につぶせるんです。じゃハエたたきでハエをつぶして、ちょっともとに戻してみなといわれたらどうします？　一発で簡単につぶれるから、一発で簡単にもとに戻るはずなんだけど、これは戻りません。それを以下同様に考えていきますと、問題がわかってくるでしょ。

二、三年前にテレビの座談会みたいなものがあって、そこで高校生が「人を殺してなぜ悪い」と質問した、というのがジャーナリズムの話題になったんです。酒鬼薔薇何とかいうのが人をやたら殺すという雰囲気が世の中にありまして、若い人が開き直ってそういう質問をしたというふうにとらえて週刊誌なんかが問題にしたんですけど、加藤典洋という評論家がそのテレビに出てたんですよ。彼から聞いたから間違いないと思うんだけど、加藤さんはあれは報道されてるのと話が違うんだと言ったんです。実際にはどうだったかというと、あの高校生はまじめな子で、人間は豚を殺したり牛を殺したりして食べるでしょ、じゃどうして人を殺しちゃいけないんですかと、その文脈のうえの質問だったんだよと。それで皆さん方、ご自分でそれに返事できますか、という話なんです。人間はそういうものを殺さなきゃ生きていけないということは確かなんですよ。そんなことは昔の人はよくわかっていますし、特に仏教はよくそれを知ってるんですよ。だから「殺生はいけない」といいつつ、ある意味では殺生を許してるでしょ。

僕はブータンに行ったからよく知ってるんですけど、ブータンの人は仏教そのものですから、中世的な生活をしています。だいたい、県庁とお寺の建物が一緒で、坊さんと行政官が同じとこでやってるわけですから、神聖政治といって神の政治なんですけど、あそこに行くとカも殺さなきゃ、ノミも殺しません。日本と違って寒いところだから、それで大丈夫なんです。ブータンは全部農民なんですけど、チベット人が亡命してきてますから、チベット人はしようがないから商売やるんですよ。村に食堂なんかがあると、それはチベット人が経営してるんです。みんなお金なんか使わないから、われわれもそうでしたけど、食料を持っていって、その食道の台所を使わせてもらって飯つくってる、

というのが基本的には食堂なんです。ラーメンとかビールくらいは置いてあります。食堂に入っていくとテーブルが水玉模様で、近づいていすに座ると水玉模様が消えるんです。水玉をつくってるのはハエだから、そばに行くときれいにいなくなるわけですよ。そこでビールをあけてコップに注いで飲んでると、当然のことですが、ビールにハエが飛び込むんです。ハエにもそそっかしいのがいるんです。そうするとブータンの人はどうするかというと、そのハエを拾って乾かして、ふっと飛ばして逃がしてやるんですよ。多少照れくさいのか、僕の顔を見てニヤっと笑って、「おまえのおじいちゃんかもしれないからな」と言うんですよ。私はそういうのが非常に好きなんですよね。その母国をロケットの国が占領しちゃってるんですよ。人間の社会っていうのはそういうものですよ。僕はどっちが高級かとよく思うんですよ。

つまり、それはさっきのロケットの話そのままでしょ。何でロケットが科学技術の粋なんだと、こういう話であります。ロケットというのは僕には鉄砲弾の親玉にしか見えないんです。あれは鉄砲弾のでかくなったものだと。鉄砲弾がどんどん小さくなってピストルの弾になるんですよ。ピストルの弾で人間を殺そうと思ったら簡単に死ぬんです。ピストルの弾は当たりどころが悪いと一発で死んじゃいますけど、そんなものはいらない。カッター一本でいいんですよ。私にカッターかメス一本くださって、皆さん方動かないと約束してくれれば、あっという間にここにいる人ほとんど全部殺して見せますよ。それはプロですから、どこを刺せばいいかわかってる。ところが、おまえカッターひと刺しで殺したんだから、カッターひと刺しでもとに戻してみな、といわれるとバンザイなんですよ。私は子どものころ、皆さんもやったかもしれませんけれども、時計を徹底的にばらしたことがあります。なにしろ、こだわるたちですから、徹底的にやろうと思って全部部品をばらして並べた。一番困ったのは最後になってからで、これを組み立てようかと思った瞬間に、何がどうなっているのかまったく覚えていません。人間が最初につくったあんな時計程度の機械でも、いったんばらすとわれわれ組み立てることができないんですよ。だけど、ナイフのひと刺しで人間を殺すことができる。僕が子どものころ、ある意味ではけんかが奨励されたんですよ。だけど、それは素手のけんかです。子どもが素手でけんかしてる。それを大人は笑って見てますけど、そこにナイフとか刃物が出てきた瞬間に、とんでもない騒ぎになります。持ち出したほうはとんでもないと、ほとんど殺人犯みたいな取り扱いを受けます。

そこによく出ているでしょ。人間と人間が素手で戦ってると人間は簡単に殺せるものじゃない。それを私はシステム同士の戦いというんですけど、システム同士が戦うと簡単には壊れません。ところが、そこにナイフとかカッターという単純な道具が一つ入ったらがらっと局面が変わるん

ですよ。それで人間という何十年もかかってやっとつくったシステムが一発で死ぬんですよ。壊れるんです。ピストルの弾も同じでしょ。だから考えてほしいのは、人が人を殺すんじゃないっていうことです。出刃包丁が人を殺し、カッターが人を殺し、メスが人を殺し、ピストルの弾が人を殺す。ところが、ピストルの弾とか出刃包丁とかカッターとか、これはものすごく単純なものです。そんなものすごく単純なものに、本来人間を殺す権利はないんですよ。それを皆さんは、「人が人を殺す」というふうに勝手に翻訳しちゃうからわかんなくなるんですよ。カッターが人を殺すという考え方ができない人が、いつの間にか人を殺しても何とも思わなくなった。青酸カリだってそうですけど、皆さんを殺すのに青酸カリ一グラムいりませんよ。青酸カリというのはものすごく単純な化合物です。KCNですもの。私だって化学式書けるんです。これを一グラム足らず飲ませた瞬間に、皆さんころっと死んじゃうんです。あんなわずかな薬をちょろっと飲ませたら死ぬんです。それじゃ同じようにわずかな薬持ってきて飲ませたら生き返るかというと、これは生き返らない。死んだらもうだめです。死んだものはもとに戻らない。

そういうふうにシステムというものは単純に一発で壊れる。ところが、それをつくれといったらとてもつくれないということにいまの人は気がつかないから、月にロケットが飛んだら科学の大変な進歩だとかいってるんですよ。あんなものは鉄砲弾が月に飛んでいっただけじゃないですか。大陸間弾道弾をどのくらいつくったと思います？　いわゆる核ミサイルというでかいやつです。旧ソ連があったときに、アメリカとソ連両方で競争でいっぱいつくったんですよ。鉄のカーテンがなくなって、これからはもう使わないだろうという話になって、アメリカとロシアが話し合って減らそうということになった。私は新聞記事に書いてあったのを覚えています。ロシアとアメリカの間で、二年間で二万発か三万発か、核ミサイルを削減するという条約を結んだんですよ。そのあとの新聞記事がおもしろかった。実際に削減しようと思って核ミサイルを壊し始めたら、なんと現在の能力では月に二、三発しか壊せない。二年間で二万発だか三万発なんかとっても壊せない、という記事が出ていた。私は本当に人間ってアホだなと思ったね。一発か二発落としただけでえらいことになるものを何で二万も三万もつくって、今度壊そうと思ったら月に二、三発しか壊せないというんですよ。そんなものつくるなというんですよ。

情報と人間

それは何がおかしいのかというと、いま申し上げたように、何かがどこかで誤解があるに違いないということでしょ。どこに誤解があるかというのは、さっきいった情報とシステムの関係です。つまり、情報というのは変わらな

いもの、単純なものですけど、皆さん方はあくまでもシステムであって、きわめて複雑なものです。人間は時計なんかよりはるかに面倒くさいものです。その面倒くさいものだという感覚自体がもうないんです。そういうシステムを人間は多少はつくろうと思った。どこでバンザイしているか。いくらかそういう努力はあって、科学技術の世界でいえばその努力はどこに出てきたかというとロボットに出てきたわけです。ですから、ともかく材料を組んで動かしてみて、人間みたいに動くものをつくろうと思ってやってみたら、ホンダのロボットができた。まだ電車に乗り遅れているという状態ですけど、あれでもスイッチを切ったら止まるんですよ。人間はスイッチを切れません。スイッチを切れないようなロボットはいつできるかというと、いつできるかわからない。無限に遠くかもわからない。

そのくらいシステムを組むということはわれわれはやってこなかったし、相変わらずへたです。だから、政治がうまくいかない、経済がうまくいかないのはあたりまえです。そんなものはこのややこしい人間が集まってつくってるシステムですから、そのシステムのややこしさなんて想像を絶するんですよ。そこに簡単な頭で考えた答えなんかあるわけないって、こっちははじめから思ってますから、そういう議論には普通参加しないんです。根拠が何にもないから。だけども、そういうややっこしいもののややっこしさをどういうふうにはかるかということすら、いまのところわからないんです。尺度がないんですからね。人間とゴキブリとどっちがややっこしいんだというと、たいていの人は人間のほうがややっこしいと思うでしょうけど、ちょっとそれを尺度にしてみなといわれると、尺度はなかなか見つからないんですよ。これから先はそういうことを定義していかなきゃいけないんですね。

そういう尺度でいって一番単純なものは何かというと実は情報なんですよ。情報っていかに単純かというと、何枚でもコピーできる。ビデオテープはコピーしようと思えば何本でもコピーできます。デジタルにしておきさえすればまったく劣化しないコピーがいくらでもできる。それが実は遺伝子ですからね。遺伝子もまったく同じなんですよ。コピーすればいくらでもできる。だから、皆さん方の遺伝子をつくろうと思えば、いまの技術だったらいくらでもつくれるんです。もとは髪の毛一本でいいんです。髪の毛一本からＤＮＡをとって、実験室のなかでどんどんＤＮＡを取って複製してやればいくらでもできます。自分の遺伝子をつくろうと思ったらバケツいっぱいつくれます。バケツいっぱいつくったって何の役にも立たないと思うでしょうけど、それを大事に取っておくと何万年か先には人間の卵――そのころになるとチンパンジーかゴリラかわかりませんけど、何かの卵の中に放り込んでやると皆さん方ができるという話になるわけです。もういっぺんチンパンジーに生まれてみてもしようがないでしょ。もう記憶はなくなっ

てますし、要するにキンさんが死んで、ギンさんが生まれてきても。それをクローンというんです。それでおわかりだと思いますが、ＤＮＡもまた情報ですから、いくらでもふやせます。

じゃそれは人間か、生きものかというと、どうもそうじゃないらしい。紙に書いたものは紙に書いたものです。情報は情報であって人間じゃありません。その区別がいまの人はつかなくなっちゃった。「私は私」「同じ私」と繰り返しいってますから。皆さん方は「私」は変わらないと思ってるでしょ。さっきからいってますように、変わらないものこそ情報なんですよ。だから、私は変わらないという人間が、「私は私」「同じ私」と思い出した十九世紀から何が起こり始めたかというと、情報化社会が始まったんです。どうして情報化社会が始まったかというと、人間が「私は変わらない」「私は私」「同じ私」だといったときに、「私は情報だ」と定義したことにほかならないから。したがって、人間は情報に変わった。したがって、情報が最も大切な社会ができてきて、それを情報化社会というんですよ。だから、その社会では電話ができて、マルコーニが無線電信を始めて、そしてそのうちベルが電話機をつくって、そのうちコンピュータのもとができて、コンピュータができて、いまではテレビが普及してケイタイはだれでも持っていて、毎日毎日コンピュータで命令やってるという世界になった。皆さん方は科学技術が進歩したとおっしゃるけれども、科学技術が進歩する背景には当然人間の考えがあるわけであって、その暗黙の前提がある。その暗黙の前提は「情報こそが世界」だというものであり、「人間が情報」だというものですよ。ですから、皆さん方はご自分を情報だと思っている。そのことを身をもって知りたかったら東大病院に行ってください。私も身をもってそこで覚えたんですから。

どういうことかといったら、体の具合が悪いから女房と一緒に東大病院に行ったら、東大病院の医者が外来でいちおう私の顔を見て、まずくれたものは紙ですからね。ばっと紙をくれて、紙に書いてあるとおり行ってくださいといわれた。何かというと病院の地図で、一番から一〇番近くまで部屋に番号が振ってあるんですよ。その順に行けばいいですからというから、私は一番という部屋に行ったんですよ。それは部屋ではなくてトイレでありまして、そこでおしっこを置いてきただけです。それで二番に行きまして血を採られて、三番に行って胸のレントゲンを撮られてずっとやって、午前一〇時から始めて午後一時過ぎに胃カメラ飲みまして、よれよれになって胃カメラが終わりまして、これで検査が終了でもとの医者のところに戻りました。女房もまったく同じ検査を受けました。何年も一緒にいますからだいたい考えることも言うことも同じになってまいります。医者のところに戻って女房とはじめてそこでまともに顔を合わせて、「異口同音」ということばがあります

けど、二人で「ああ、疲れた」と同じことを言ったんですよ。そこまではだれでも言うんですけど、その次まで同じだった。「丈夫じゃなきゃ医者には来れないよね」と二人で言ったんですよ。それで医者は何と言ったかというと、「一週間たったら検査の結果が出るからまた来てください」と言ったんですよ。それでおしまいです。

その途端に、僕はこういう性格ですから、頭のなかで言い返したわけです。一週間たったら来いというけど、それじゃきょうから三日目におれが心筋梗塞か脳卒中で死んだらどうなんだよとまず思って、四日目に女房がおれを火葬しちゃったら、検査の結果は全部ゼロになるよなと。身長・体重・胸囲・血圧、以下全部ゼロです。ところが病院のほうは律儀に検査の結果を出してくる。考えてみれば、出てきた検査の結果というのは一週間前の私の体ですから、なるほど現代医療はすべて手遅れ医療だということがそこでわかったんです。それで出てきた結果というのは何かといったら、それは一週間前の私の体に関する情報じゃないか。現在の医者はその情報を扱っている情報処理技師なんですよね。だから、患者さんそのものはどうでもいいんです。

そうすると患者さんそのものを扱わなきゃならないのはだれかと考えると、病院に行けばすぐわかりますが、看護婦さんですよ。だから、ある時期から看護婦さんが神様に見えてきたわけですよ。ところが最近、僕は看護学科でいろいろ教えてますけど、その看護学科の学生さんが論文書いたり勉強するようになりましたから、つまり情報を扱うようになってきたから、このまま看護科学というのが進んでいくと何が起こるかというと、看護婦さんは医者に近づいていってどんどん情報処理屋になってくるわけです。ですから、医師会に行くと私は必ず「病院の未来」とかいう話をさせられますから、「病院の未来は付き添いさんにかかってる」と言うわけです。患者さんをまるごとみてるのは付き添いだけですからね。

そういう世界がどうしてできてきたかというと、根本的には皆さん方が「自分は情報だ」と決めたからですよ。だから、その皆さん方を診ている医者のほうも、きょう来たのは情報だと思っているわけです。したがって、当然のことですが、情報を取り扱って徹底的に検査をする。検査をしないで患者に薬でもやろうものなら、あとで医療訴訟になってえらい目に遭って完全に医者の落ち度になりますから、絶対検査するに決まっています。だからお年寄りの患者さんのお見舞いに行くと、僕が医者であって、医者でないと知っていますから、「先生、受け持ちの先生にもう検査はやらないように言ってくださいよ」と必ず言われます。でも、若い先生は断固として、検査やるといいます。それはよく考えてみると、患者のためじゃないんですよ。医療訴訟が起こったら検査してなきゃおれが負けると思っているからですよ。医療訴訟は神奈川県で六十何件起こってい

まして、現在進行中です。何でこういうめちゃくちゃな社会をつくってるんだか、私はわかりません。僕は普通の人に、そんなに医者のやることが信用置けないんならおまえ医者をやれといつも言ってるんです。自分でやってみればどのくらい自分が信用置けるかわかってくる。だから、あんたどうしてるんだと聞かれるかもしれないけど、私は普通医者に行きません。何で医者に行かないんですかと聞かれると、おれが教えた学生なんか信用できるかといつも言うんです。自己責任ってそういうことですからね。

いま「変わる・変わらない」でずっと話を申し上げてきたわけですが、たぶん私は一生「変わる・変わらない」というテーマを何となく追いかけているんだろうと思います。最初に申し上げたように、何でそうなっちゃったかというと、それは結局戦争だという話を申し上げました。何のことはない、ある意味では六十何年戦争を続けてるんです。だって、その影響で生きてきたんですからね。そのときにもらったのが「変わるもの・変わらないもの」というテーマで、それがとうとう「情報と人間」まで行っちゃったんです。これから先も相変わらず、それをやってるんだろうと思います。六十六で、いつ死んでもおかしくないという年になってきましたから、それはもう確実なんです。それが証拠に、よく申し上げるんですけど、この間の本の最後に書いたんです。

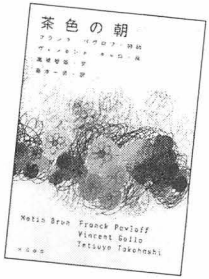
僕は北里大学でまだ講義をやってるんです。三階の講堂で講義してるんですが、この年になるとけっこうきついんですよ。朝息せき切って三階まで階段を上がる。ことしの春、はじめての講義で行ったら、なんと三階まで上がる階段のところにエレベーターができてたんです。それでうれしくて、しめたと思ってエレベーターに乗って上がろうと思ったけど、エレベーターを見た瞬間、上に「身障者専

これは昔々ある国に起こったおとぎ話じゃない

茶色の朝

[物語]フランク・パヴロフ　[絵]ヴィンセント・ギャロ
[メッセージ]高橋哲哉　[訳]藤本一勇　絶賛発売中！

フランスで50万部突破のベストセラー。「ごく普通」のファシズムが、私たちの日々の生活に知らぬ間に忍び込み、行動や考え方をだんだんと支配するようになるさまを見事に描いたショート・ストーリー
46判カバー・48頁・1000円(税別)



大月書店
東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
http://www.otsukishoten.co.jp/

用」と書いてあったんです。これ乗っていいか悪いかわからないじゃないですか。しようがないから乗らないで講堂まで行って講義を済ませて、そのあと事務に行って「エレベーターできたね。だけど身障者専用と書いてある。僕乗っていいの？」と聞いたら、「先生、いくつ？」と聞きやがる。六十五だよと言ったら、「六十五歳以上は身障者です」と言われたんですよね。ですから、もう乗っていいんです。どうしてあんなものつくったの？　と言ったら、「それは先生、いまはバリア・フリーの世の中ですから」とこう言ったんですよ。だから僕は「おまえさんね、バリア・フリーというなら入学試験何とかしてよ。体の具合が悪いと学校の費用でエレベーターまでつくってくれるけど、頭の具合が悪いと門前払いじゃないかよ」と言ったんです。

二〇〇五年にスペシャル・オリンピックスというのを長野でやります。ご存知でしょうか。パラリンピックというのは身体に障害がある人たちのオリンピックで、スペシャル・オリンピックスというのはただのオリンピックです。これは知的障害の人のためのオリンピックですから、ただのオリンピックです。私は普通のオリンピックを見ていると、どう見ても知的障害としか思えないときがあるんです。だって、ものすごくいい体した、りっぱな若い人が必死になって一〇〇メートル走ってんですもの。それでこのくらい差があったとかないとかいってる。どうしてああいうふうに一生懸命になるのか全然わからない。あれはひょっとして知的障害じゃないかというふうに思う。それでドーピングがいけないとかいろんなことをいうんですが、よくよく聞いてみると走るグラウンドは徹底的に科学技術の粋を尽くして、二重にしたり三重にしたりして最も走りいいようにしている。それで以前に比べて記録がよくなったというのはあたりまえじゃないの、とこっちは思うわけですよ。何でグラウンドをそれだけよくしているのに体いじっちゃいけないのと、また思うわけです。どう考えてもあれはまともな世界に見えないんです。ですから、知的障害者のためのオリンピックというのは、私は普通のオリンピックといってるんです。

日本の教育では逆に、一番つくっちゃいけないとか、ビリつくっちゃいけないといっている。だから、秋の運動会は全員一緒にゴール・インとか言ってません？　あれはそれを言ってる人が順位にこだわっている証拠なんですよ。僕はこだわってませんもの。僕がそういう順位にいっさいこだわっていないという根拠は、さっきトラック競技だったら一番ビリ走ってりゃ、そのうちトップに見えることあるよと言ったんですけど、一〇〇メートル競走もまったく同じで、後ろからトラが追いかけてきて必死に逃げたときに、食われるのはビリなんですよ。だけど、ゴールにトラが待っていると食われるのは一番なんですよ。人生六十六年やってくると、人生ってそういうもんだとわかってくるから、別にトップでどうってことない、ビリでもどうって

ことないよとこういう話になるんですけど、それを気がつかない人がいて、根本的に一番とかビリに意味があると思っているから、つくっちゃいけないとか言う。そういう考えが私は一番不健康だと思っています。個性を認めるということはトップからビリまで必ずいるということで、それでいいんです。教師のほうからすればビリというのは偉いんですよ。あいつがいないとだれかほかの人が必ずビリになるんですから。ですから、私が一番面倒を見てきたのはいつもビリの学生です。給料はほとんどそのために使ったんじゃないかという感じがします。

ご清聴ありがとうございました。

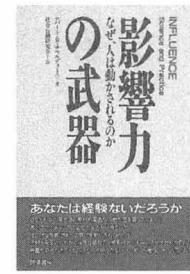
＊　本稿は二〇〇三年十一月十四日、新宿・紀伊國屋ホールにおける人文会主催の第一三二回紀伊國屋セミナーでの講演を一部省略して掲載するものです。

◉わが社の一冊＊晶文社

『「心」と戦争』
高橋哲哉著
初版二〇〇三年四月刊
四六判・二三〇頁
本体一四〇〇円

この国では「戦争ができる国づくり」への動きが強まっている。しかし、いくら法律を完備しても戦争はできない。それをになう国民の「心」が求められている。教育基本法改正、道徳副読本『心のノート』の全小・中学生への配布、有事法制など、平和憲法離れが加速するこの時代の根底にあるものを思想的に分析し、どのように生きるかを問う注目の書。著者は小泉首相のレトリックや防衛庁制服組の言動、官庁発行の文書、戦前リベラリストの日記など幅広い素材から、進行する「グローバル時代の愛国心」の理念と方法を読み解いていく。教育基本法改正がめざしているものは何か。「国民精神」はいかにして創出されてきたか。戦死者が英雄視され、さらなる戦死者を生みだしていく回路を断ち切るには——。自衛隊のイラク派遣も、競争が激化する教育現場の問題も、他者への想像力が私たちひとりひとりに求められているのを実感する。現実から思考する哲学の最前線に立つ著者の筆は鋭い。

◉わが社の一冊＊誠信書房



『影響力の武器—なぜ、人は動かされるのか』
ロバート・B・チャルディーニ著
社会行動研究会訳
初版一九九一年九月刊
A5判・三七四頁
本体三三〇〇円

後を絶たない悪徳商法。犯罪ではないにしろ、お誘いを断りきれない人たち。なぜ人は「承諾」して（カモになって）しまうのか。なぜ、「要請」を受け入れてしまうのか。

好意・権威・希少性など、人間行動を導く基本的な心理学の原理が、説得のプロの戦術にパワーを吹き込み、その結果……購買・寄付・譲歩・同意など、悲しくも可笑しい結果を生み出す。

社会心理学者であり、《だまされやすい人》を自認する著者は、セールスマンや募金勧誘者、広告主など、承諾誘導のプロ（影響力の実践家）の世界に入り込み、彼らのテクニックや方略から、人に「うん」と言わせる心理的メカニズムを解明した。

情報の氾濫する現代社会で、何気ない承諾をしてしまう傾向を引き出す影響力を、結論の根拠となる研究結果を付け加えながら解説。一気に読ませてしまう痛快なる本。

◉わが社の一冊＊創元社

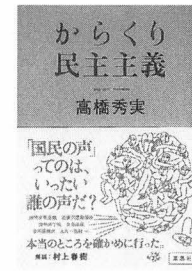
『人を動かす』
デール・カーネギー著
山口博訳
初版一九九九年十月刊
四六判・三五二頁
本体一五〇〇円

『英文毎日』主筆を務めたこともある加藤直士という人は、クリスチャンで大阪教会に属していた。創元社社長の矢部良策も同じ教会に所属していたこともあって、加藤と親しかった。ある時、加藤は矢部にこんな情報をもたらした。加藤の甥が最近ニューヨークから帰ってきたが、アメリカで話題の本を持ち帰ったという。『いかにして友を得、人々を動かすか』という書名だった。

抄訳にして、『人を動かす』という書名で刊行した。昭和一二年（一九三七）のことである。売れ行きはまずまずだった。昭和三三年に全訳を出した。

売れ行きが爆発的になるのは、高度経済成長のころからである。通算何部売れたか、古すぎて記録がないが、推定四三〇万部くらいだろう。出版史を彩る大ベストセラーに比べれば大したことではないが、毎年確実に重版していける本はありがたい。

◉わが社の一冊＊草思社

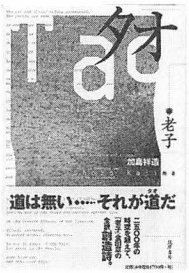


『からくり民主主義』
高橋秀実著
初版二〇〇二年六月刊
四六判・二八八頁
本体一八〇〇円

正義と悪に明確に分けられ報じられる「社会問題」の本当のところはどうなのか。例えば、沖縄米軍基地の問題。返還されればすべては解決するのか。基地収入を前提とした地域経済で生活する住民たちの本音とは。あるいは、諫早干拓地問題。干拓がもたらした影響は、地域と時期によって大きく異なるという。原発や新興宗教や人権問題等、現在の社会問題の実相をじっくり見据えて戦後民主主義の奇妙な歪みをあぶり出した異色のノンフィクション。村上春樹解説。

養老孟司、大岡玲、安原顯、久間十義、斎藤美奈子、中野翠、山崎浩一など多数の知識人が書評にとりあげ絶賛したロングセラー。

◉わが社の一冊＊筑摩書房



『タオ―老子』
加島祥造著
初版二〇〇〇年三月刊
四六判・二四〇頁
本体一七〇〇円

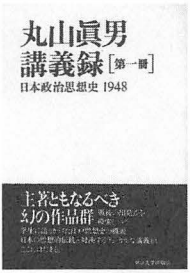
『タオ―老子』が刊行されて四年近くになります。七万五千部と予想をはるかに超えて、老子ブームが続いています。戦後、日本で老子が一般の広い関心を集めたのは初めてとも言われています。本書が老若男女の心を捉えることができた魅力はどこにあるのでしょうか？

まず、著者が老子の「声」に耳をすまし、命のメッセージを感得して、私たちの心に響く言葉を生みだしてくれたことです。そして、さりげない詩句で語られる宇宙の神秘や私たちの進むべき道が身近なものになりました。

老子の考えには「争わない、欲張らない、人の後ろから歩く」などがあります。人は社会での成功や物質的達成を望みますが、老子はそんなことは人生の本当の幸せではないと言うのです。「いまあるもので充分、と知る人だけが、いま生きることの豊かさを知るんだよ」と説きます。

このように、いま私たちがどのように生きたらいいのかを教えてくれる智慧の宝庫といえます。

◉わが社の一冊＊東京大学出版会



『丸山眞男講義録』全七冊
丸山眞男著
初版一九九八～二〇〇〇年刊
A5判・平均三〇〇頁
本体三二〇〇～三六〇〇円

著者は東大法学部における歴年講義に研究者として最も心血を注いだ。毎年新たに講義案を作成して臨む先生と教室にみなぎる緊張感とは、講義に列した多くの学生によって今も忘れがたく語り継がれている。本書の公刊によって初めて公にされた多くの部分が、丸山思想史学の欠を埋める決定的な意味をもっている。もし完成されていれば主著ともなるべき幻の作品群は、同時に戦後史を刻む知的ドキュメントと言えよう。

編集に当っては、本文は講義のための自筆草稿・ノートにもとづき、受講学生が起こした講義プリントに生前著者が校訂を加えたもの、さらに聴講学生から提供された筆記ノート等によって、実際の講義の復元に努めた。

第一・二冊は戦後初期講義、第三冊は六〇年安保の年の政治原論、第四―七冊は古代から近世に至る画期的な通史を構成し、時々の講義に投影された著者のラディカルな時代感覚などについて編集委員による解題を付し、新資料にもとづく丸山像を提示する。

研修旅行報告

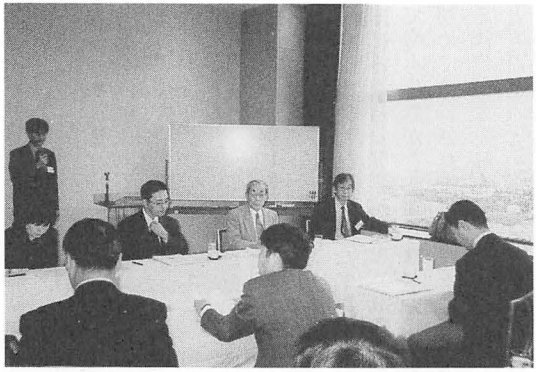
田﨑洋幸（みすず書房）

二〇〇三年一〇月一六日～一八日の期間で、北海道にて人文会研修旅行が行われました。今回は札幌を中心に一〇店舗と、トーハン様、日販様の北海道支店を訪問させて頂きました。

個人的には久しぶりの北海道でしたが、予想以上に経済状況が厳しいという印象を持ちました。その中で旭屋書店札幌店と三省堂書店札幌店が新規出店をしたことで全国的にも激戦区となり、既存の書店が路線変更も含めた見直しを迫られているという状況に思えます。さて初日に旭屋書店札幌店様、二日目に紀伊國屋書店様グループと研修を行わせて頂きました。事前に提出頂いたアンケートを基にしましたが、総じて出版社との情報交換を密にすることで販売力を強化したいという意見が多かったように思います。

旭屋書店様は出店以来好調ということで、売り伸ばしはもちろんですが、売り損じを特に気にされていたように感じました。顧客を定着されるためには、売行き良好書の確実な販売が不可欠ということでしょうか。紀伊國屋書店様グループは、札幌本店様をはじめ道内の店舗の方々、また北海道地区総支配人様にもご出席頂きました。駅ビルに出店した上記二店舗の対策を模索されていて、お互い率直な意見が交わせたと感じております。

幸い参加された書店の方々は皆さま熱心なので、出版社サイドが的確な情報を提供することが販売に結びつき、いい結果となることが想像できた研修会でした。



土岐和義（平凡社）

当会では、毎年秋に販売会社様にも同行を願って、全会員で書店様を訪問させていただいております。普段は電話等のつながりだけの書店様と直接お話をし、お店の空気に触れる貴重な機会です。

今回は一〇月一六日（木）から一八日（土）の三日間、秋の風さわやかな札幌へ。同行いただいたのはトーハン・関口マネジャー、日販・逸見課長、大阪屋・秋山課長のいずれも書籍仕入のお三方。総勢二四名の研修旅行となりました。

旅行幹事の心配は、まず出発時間にちゃんとメンツが揃うかどうか。これはさすがに無事クリアとなりました。最悪の場合の手配を考えたりしていたのですが……。

さて、快晴の札幌。昔の札幌駅しか知らない会員には、どうなっちゃたんだというほど一新した風景です。若者向けファッションの店内からエレベーターで旭屋書店さんへ直行。三月開店のワンフロア八〇〇坪は豪華です。しばし店内を遊弋した後、武田店長と上野さんからこの半年の話をしていただきました。

今はやっと落ち着いてきましたが、開店後しばらくはどのジャンルに関しても、入門書から専門書レベルまで補充が追いつかない戦争状態が続き、店長自ら泊り込みもあったとのこと。それほど広い客層だけに、「何だこんなものか」とお客様に思われないように、品揃えをいつも意識しなくては、と武田店長。われわれ人文会各社でも、専門書の販売で当てにできる、その分動向を注目しなければならない書店さんが誕生したのだと思います。

次は横に長い駅のビルの長い廊下を歩いて反対側にある三省堂さん。こちらは大丸百貨店の八階に三〇〇坪で営業。旭屋さんと同様、開店当初は補充で大変だったという江戸店長と北川さんです。さすが高級デパートの来店客を掴み、値段をとわず芸術書、話題の本が好調です。

続いて北海道大学生協のクラーク店へ。上端店長、人文担当の片岡さんに、今は北海道地連のなつかしい高杉さんにお会いし、ちょっと時間不足の懇談。人文書、きちんとご販売いただいていて相変わらず頼もしいお店でありました。この後駆け足で紀伊國屋書店札幌ロフト店さんを訪問。旭屋さん開店の影響をもろに受ける場所なのですが、ロフトという環境を活かした品揃えを追求されているようでした。

駆け足の訪問のあとの懇親会。トーハンさん、日販さんの支店からもお客様を迎え、札幌の夜はにぎやかに過ぎていきました。

明けて翌日。トーハン・日販さんの支店に伺い、平山支店長、深野支店長から北海道の動静のレクチャー。それをアタマに入れてまず紀伊國屋さんを訪問。市川支配人・大曽根店長はじめ、担当のみなさんと質疑応答。激戦区をひしひしと実感。紀伊國屋さんでは外商とお店が協力して、

大学をはじめとした顧客の需要を掘り起こし、応えていこうとする態勢を構築されています。

続いて丸善南一条店さん。一般のお客さんの本への関心を呼び起こし、話題の本をしっかり売っていこうととする指向を感じました。北海道関連の本も充実。お店の周辺は札幌の中心部。ついつい行き交う女性たちに眼がさまよってしまうオジさん集団でございます。

市内の最後はリーブルなにわさん。規模ではなく特色を出した品揃えで勝負。人文書、ちょっとカルトな本もさりげなく見せる充実した棚です。役員の荒山さんと新居店長、お客さんの目の動きをしっかりフォローされてます。

さて、中心部から移動して郊外のコーチャンフォーさんと紀伊國屋書店平岡店さんへ向かいます。コーチャンフォーさんは北村店長さんほか幹部の方が会議で不在にもかかわらず押しかけしまいましたが、広くてきれいな店内は楽しくて、なかなか立ち去りがたい会員も約一名。紀伊國屋書店平岡店さんは重厚な品揃えの郊外店ですが、ゆっくり海鉾店長さんのお話も聞けず、ちょっと残念な訪問に終わってしまいました。

ここで慌ただしい研修旅行は一段落ですが、最終日、紅葉盛りの峠を越えて港町小樽へ。ぜひ、という有志の希望により、事前にお願いもせず、恐縮ながら急遽勝手に一二〇〇坪の喜久屋書店さんを見学させていただきました。壮観、の一語と申しましょうか、いやぁ大変なものです。

研修旅行はついつい欲張りなスケジュールになって、お騒がせの中年男集団がお邪魔ムシをいたしまして書店様には誠に申し訳ないことになったことをお詫び申し上げます。

にもかかわらず、こころよくご対応いただいた皆さまに、改めて御礼申し上げる次第です。ありがとうございました。

2003年人文会研修旅行 訪問先一覧

訪問先名	郵便番号	住　　所
紀伊國屋書店 札幌店	060-0061	北海道札幌市中央区南1条西1-14-2　有楽ビル TEL 011-231-2131　FAX 011-241-0526
紀伊國屋書店 平岡店	004-0873	北海道札幌市清田区平岡3条5丁目276-1　イオン札幌平岡SC 2F TEL 011-889-1331　FAX 011-889-1334
紀伊國屋書店 札幌ロフト店	060-0004	北海道札幌市中央区北4条西3丁目1　札幌ロフト5階 TEL 011-232-0121　FAX 011-232-0155
コーチャンフォー 美しが丘店	062-0000	北海道札幌市清田区美しが丘1条375-160 TEL 011-889-2000　FAX 011-889-2810
三省堂書店 大丸札幌店	060-0006	北海道札幌市中央区北5条西4丁目7番地　大丸札幌店8階 TEL 011-222-4650　FAX 011-222-4640
東京旭屋書店 札幌店	007-0837	北海道札幌市中央区北5条西2丁目5番地　JRタワー札幌ステラプレイス5F TEL 011-209-5181　FAX 011-232-2248
丸善南一条店	060-0061	北海道札幌市中央区南1条西3-8 TEL 011-241-7252　FAX 011-221-8595
リーブルなにわ	060-0061	北海道札幌市中央区南1条西4　日之出ビル TEL 011-221-3800　FAX 011-251-8531
喜久屋書店 小樽店見学	047-0008	北海道小樽市築港11　ウイングベイ小樽3F TEL 0134-31-7077　FAX 0134-31-3211

*

トーハン北海道支店	060-0041	北海道札幌市中央区大通り東9-99-1 TEL 011-281-5311　FAX 011-210-2711
日販北海道支店	060-0001	北海道札幌市中央区北1条西13-1-1 TEL 011-251-5201　FAX 011-271-6763

人文会活動報告（平成15年下半期）

5.16　第36回（2002年度）人文会総会（箱根「紫雲荘」にて）
会計報告／各委員会活動報告／幹事・委員長選出と各委員会メンバーの編成

5.27　人文会創立35周年記念書店座談会（東京大学出版会会議室）
テーマ：「21世紀の人文書の棚…35歳の主張」
出席書店：往来堂書店　笈入健志／紀伊國屋書店新宿本店　和泉仁士／くまざわ書店桜ヶ丘店　宮下美紀子／ジュンク堂書店池袋本店　澤樹伸也／株式会社ブックワン　瀬尾俊二／丸善日本橋店　小松原俊博／リブロ池袋店　松下康子／往来堂書店　笈入健志／司会進行　新保・段塚・田崎

6.18　例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
- 国立情報学研究所川瀬課長と紀伊國屋安藤理事来会。「Webcat Plus」について説明とデモ。
- トーハン書籍営業部　野村部長，鶴巻シニアマネージャー，関口マネージャー来会。トーハンの現状について報告。

6.23～ 7.11　人文会セット店グループ訪問
新潟・群馬グループ（7.10～11）／名古屋・豊橋グループ（6.26～27）／京都・大阪グループ（6.23～24）／神戸・広島グループ（6.20～21）／福岡・北九州グループ（7.4～5）

7.16　例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
＊例会に先立ち臨時総会の開催：担当者の変更と所属委員会の変更，書記幹事・35周年委員長の変更の承認

8.20　例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）

9.24　例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
- ジュンク堂岡専務，大阪屋山本部長来会。ジュンク堂名古屋店出店の挨拶。

10. 1　『人文会ニュース』35周年特別号刊行

10.16～18　人文会研修旅行（札幌地区）
訪問書店様：東京旭屋書店札幌店／紀伊國屋書店札幌店／紀伊國屋書店平岡店／紀伊國屋書店札幌ロフト店／コーチャンフォー美しが丘店／三省堂書店札幌大丸店／丸善南一条店／リーブルなにわ／北海道大学生協クラーク店
会員社21名／同行販売会社様：関口晴生（トーハン書籍仕入マネジャー）・逸見剛（日販書籍仕入第２課長）・秋山隆博（大阪屋東京本部書籍仕入課長）計３名　総勢24名

10.25 『人文会ニュース』90号刊行

11. 8 人文会創立35周年記念セミナー（ジュンク堂書店大阪本店）
講師：内田樹　　主催：ジュンク堂書店・人文会

11.14 人文会創立35周年記念・第132回紀伊國屋セミナー（新宿・紀伊國屋ホール）
講師：養老孟司「ニホン人の壁」　　主催：紀伊國屋書店・人文会

11.18 例会（出版クラブ会館）
●広島フタバ図書世良社長・佐々岡部長・池田氏来会。出店のご挨拶。

12. 1 「人文書のすすめⅢ」刊行

12.17 例会（神田，文化産業信用組合本部会議室）
●大阪田村書店田村社長・大阪屋山本部長来会。リニューアルオープンのご挨拶。

人文会会員名簿

（〒113-8654　東京都文京区本郷7-3-1　東京大学出版会内）　2004年2月現在

社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
青木書店	古川　清	175-0092	板橋区赤塚8-12-12	5997-4051	5967-7691
大月書店	大和　定幸	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石　修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚　省吾	150-8513	渋谷区東3-13-11	5469-5918	5469-5958
勁草書房	古賀　宣貴	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	鎌内　宣行	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	島田　孝久	101-0021	千代田区外神田2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠信書房	新保　卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	重光　義彦	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野　英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	平川　恵一	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	江波戸　茂	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	佐藤　英明	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	土岐　和義	112-0001	文京区白山2-29-4 泉白山ビル	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田　共助	102-0073	千代田区九段北3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎　洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田　啓三	607-8494	京都市山科区 日ノ岡堤谷町1	075-581-5191	075-581-8379
未來社	西谷　能英	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
有斐閣	大場　章正	101-0051	千代田区神田神保町2-17	3265-6811	3262-8035
吉川弘文館	馬場　正彦	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事　大江治一郎
会計幹事　重光義彦
書記幹事　新保卓夫

（◎委員長　○副委員長）

販売委員会
- 企画グループ　◎鎌内宣行・島田孝久・成田共助・馬場正彦
- 研修グループ　○田崎洋幸・古賀宣貴・土岐和義・大場章正
- 図書館グループ　○段塚省吾・古川　清・大和定幸・江波戸茂

弘報委員会
- 弘報グループ　◎杉田啓三・平石　修・佐藤英明・西谷能英
- ＨＰグループ　○浴野英生・平川恵一

〝反日〟キャンペーンがもたらした恐るべき結果

「反日」で生きのびる中国

―江沢民の戦争

鳥居民

一九九四年『愛国主義教育実施綱要』の公布から中国全土で展開された〝愛国＝反日〟キャンペーン。その真の目的とは何だったのか。●1470円

草思社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8 5%税込
☎03(3470)6565 http://www.soshisha.com/

心理学 第2版

鹿取廣人・杉本敏夫編

「こころの科学の入門書」として最も高い評価を得てきたテキストが全面改訂。すべての心理学領域に必要な基礎の体系的な記述、豊富な図版、最新の成果を盛り込み、豊富なコラムなどで、さらに充実した入門書となった。読みやすい二色刷。A5判／二五二〇円

多文化間カウンセリングの物語（ナラティヴ）

S・マーフィ重松著／辻井弘美訳

私という物語をつむぎ直すとは、どういうことか。ナラティヴ・セラピーのモノグラフである本書は、自己の語りを恢復しようとする人とカウンセラーとがともに歩む詩的な物語でもある。

四六判／三〇四五円

東京大学出版会 ［価格税込］
東京都文京区本郷7-3-1 ☎03-3811-8814

日本評論社

家族関係学入門

ケースで学んだ家族のライフコース

瓜生 武

家裁調査官としての豊富な体験をふまえて、家族内の社会心理の綾を解き明かし、家族病理に対する処方箋を提供する。

1785円

サナトリウム残影

結核の百年と日本人

高三啓輔

20世紀は戦争と結核の百年であった。サナトリウム（結核療養所）の盛衰をたどりながら、結核に苦悩した日本人の姿の一端を記録する。

2625円

サービスセンター☎049-274-1780 価税込
http://www.nippyo.co.jp/

ミシェル・フーコー講義集成 XI

主体の解釈学

コレージュ・ド・フランス講義 1981-82

廣瀬浩司・原和之訳 西欧文明における〈主体〉の歴史を系譜学的に描き出す壮大な試み。フーコー思想の頂点を示す講義。 6400円

ちくま学芸文庫……

ブリタニカ草稿 現象学の核心

E・フッサール 谷徹訳 1300円
始祖自身による現象学入門の決定版。

エロティシズム

G・バタイユ 酒井健訳 1500円
バタイユ思想の核心。新訳決定版。

サービスセンター 筑摩書房 048-651-0053
＊税別 http://www.chikumashobo.co.jp/

法政大学出版局

http://www.h-up.com/

N・ルーマン／馬場・上村・江口訳
社会の法 1・2
法とその外部との間に潜む矛盾を暴き、法・人間・社会の関係を再確立する試み。オートポイエーシス理論の展開。①4400円②4600円

S・ユーウェン／平野・左古・挾本訳
PR！ 世論操作の社会史
商品や企業の広告から時の政権による情報操作まで、パブリシティの生理と病理、人間と社会に対する深刻な影響を明らかにする。6900円

フランスを知る
都立大学仏文研究室編　言語・文学から社会・歴史・宗教・思想まで，最新の情報にもとづいたフランス小百科。3800円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 ／表示価格は税別です

白水社

本はかつて鎖につながれていた！

ヘンリー・ペトロスキー　池田栄一●訳

本棚の歴史

書斎で、書店で、図書館で、人は本に目を向けるが、それを収納する本棚には関心を払わない。書物の発達と共に進んできたこの道具の歴史を名著『鉛筆と人間』の著者が跡づける。
定価3150円（本体3000円）

101-0052東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp

平凡社

白川静 常用字解

『字統』『字通』の著者が常用漢字に絞って、そのもとの形から漢字の成り立ちを立証し、字形と意味との関係もやさしく正確に解説。よく使用される用例もあげて書き下ろした、漢字の入門字典。●定価：本体2、800円（税別）

〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
☎03-3818-0874／fax03-3818-0674
http://www.heibonsha.co.jp/

史上最悪のインフルエンザ
クロスビー　疫禍と社会構造の相関図を描出する感染症学の必読書。疫病危機管理の急所をしめす。西村秀一訳　三八00円

芸術と貨幣
シェル　古代から脈々と続く貨幣に隠された意味の論理を美術作品から探る、類例なき刺激的思想史。小澤博訳　三五00円

共感する力
野田正彰　政治の混乱、戦争への危機、教育現場の歪み、犯罪の背景等を論じ、混迷する状況を撃つ同時代批評集。三六00円

丸山眞男書簡集 2　一九七四―一九七九
南原繁の死、ロッキード事件、「戦中と戦後の間」刊行と「思想史の方法を模索して」発表。七〇年代の一七三通。三五00円

みすず書房（税別）
東京文京本郷 5-32-21 http://www.msz.co.jp

有斐閣 出版案内 (価格は税別)
東京・神田・神保町2/Tel:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

3月16日発売
六法全書 平成16年版
編集代表 青山善充・菅野和夫
菊判・二冊組 計六二三六頁 九六〇〇円
＊収録法令一〇一七件
個人情報保護法、裁判迅速化法、地方独立行政法人法、行政機関個人情報保護法、武力攻撃事態法、国立大学法人法、性同一性障害者特例法、人事訴訟法、仲裁法、心神喪失者処遇法、食品安全基本法、組織犯罪防止条約等、37件を新収録。

CD-ROM
有斐閣 判例六法・小六法 平成16年版
＊収録法令四三四件
BT-ON-C版 (for Windows) 六〇〇〇円

ミネルヴァ書房

《ミネルヴァ日本評伝選》監修委員 上横手雅敬 芳賀 徹

源満仲・頼光
元木泰雄●殺生放逸 朝家の守護 武門源氏の始祖である父子の光と影。二五二〇円

好評既刊
吉田松陰 海原 徹 2310 2刷
長谷川等伯 宮島新一 2520
瀧川幸辰 伊藤孝夫 2310 2刷
日蓮 佐藤弘夫 2625
京極為兼 今谷 明 2310
佐竹曙山 成瀬不二雄 2625
高村光太郎 湯原かの子 2310
続刊 北条政子 関 幸彦 2520

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 宅配可／価格は税込

最も精確で信頼できる「天皇事典」の決定版！
歴代天皇年号事典
米田雄介編 (元正倉院事務所長)
一九〇〇円 (税別)
四六判・函入 四八八頁
『内容案内』送呈
神武から昭和まで、すべての天皇と年号を網羅
在位中に制定された年号と由来を詳細に解説
便利な天皇一覧・皇室系譜・年号対照表・索引を付載
使いやすさを追求した堅牢かつハンディな造本
大好評 たちまち3刷
吉川弘文館
東京都文京区本郷7-2／電話 03-3813-9151

ヴェーバー「詐欺師」説への反論！

ヴェーバーを読むとはどういうことか？

そして、
学者の倫理と責任とは？

折原浩著
ヴェーバー学のすすめ
定価1890円(税込)

未來社
東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel 03-3814-5521 www.miraisha.co.jp

10年ぶり、待望の本格的文芸評論

文学的商品学

斎藤美奈子

「カタログ」を読むように小説を読む。大御所作家もベストセラー作家も、並べてみると意外なところにセンスの差が！　気づかなかった小説の読み方の極意を伝授　◆1600円

幸福は絶望のうえに

コント=スポンヴィル／木田元、他訳

絶望の真の価値を知る人だけがほんとうの幸せを知ることができる。フランスで人気の哲学者が語る、画期的な幸福論。◆1400円

日露戦争スタディーズ

小森陽一・成田龍一　編著

開戦一〇〇年！　近代日本を方向づけた、あの時代と社会をいま問い直す。気鋭の執筆陣による野心的論集。図版多数収録。◆2200円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918　表示価は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

青木書店

村瀬裕也［著］

東洋の平和思想　¥2600

墨子、孟子、杜甫、また伊藤仁斎、安藤昌益、幸徳秋水らの思索のなかに、現代に生きる平和思想を読み解く。

保立道久［著］

黄金国家　東アジアと平安日本　【シリーズ】民族を問う③　¥3000

激動期の東アジア世界の中で、独占的権益を確保する貿易システムを形成し、「神国」の「万世一系」の王を自認する王権の内実を描く。

東京都千代田区神田神保町1-60
電話［03］3219-2341　Fax［03］3219-2585

勁草書房

斎藤　環

解離のポップ・スキル

犯罪から漫画まで，同時代の貌を映す精神分析クロニクル。2200円

トーマス・シュランメ／村上喜良 訳

はじめての生命倫理

基本的なトピックスをもれなく紹介。考え方の道筋を示す。2700円

湯浅正彦

存在と自我

カント超越論的哲学からのメッセージ　思索は一貫したか。5500円

北田暁大

責任と正義

リベラリズムの居場所　社会システム理論と正義論の架橋。4900円

東京都文京区水道2-1-1＊価格税別
Tel 03-3814-6861／Fax 03-3814-6854
http://www.keisoshobo.co.jp

◎「〈法〉と〈法外なもの〉」、「法の共同体」に次ぐ社会哲学論考の第三弾！

仲正昌樹著

歴史と正義　史的構想力の回復に向けて

ドイツ・ロマン派からベンヤミン、吉本隆明、フーコー、ネグリに至る反歴史哲学の系譜を振り返り史的構想力の回復を考察

A5変型・二七〇頁・二六〇〇円

既刊

〈法〉と〈法外なもの〉　仲正昌樹著　二六〇〇円

ベンヤミン、アーレント、デリダをつなぐポスト・モダンの正義論へ

法の共同体　仲正昌樹著　二六〇〇円

ポスト・カント主義的「自由」をめぐって

◎大佛次郎論壇賞、毎日出版文化賞受賞のベストセラー「〈民主〉と〈愛国〉の外伝!!」

小熊英二著

清水幾太郎　ある戦後知識人の軌跡

平和運動から核武装論へと変転した知識人の軌跡から戦後社会の変貌を問いなおし、人間と時代との関わりを考察する。

神奈川大学評論ブックレット26　一九六頁・一〇〇〇円

御茶の水書房　価格は税別

東京都文京区本郷5－30－20　電話03(5684)0751

2004年3月30日発行　年4回発行　第92号
発行所　人文会　東大学出版会内
〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1

〈非売品〉